

心の托鉢

第一話・人とのかかわり

早坂浩八

人は、自分の視野の中に、自分以外の生きものの姿が入って来るのは、生まれてから間もなくの相当早い時期であろう、と思います。

それ以来、今日まで多くの人と付き合いが来ています。

自分への意識が目覚めていくに従って、自分の中で他人の存在も成長していく訳ですが、人は多くの人とのふれ合いをもち、交わり、ともに歩いたり、あるいは離れていったりしながら、生きていくのでありましょう。

人とのかかわり、それは自らが求めたものもあり、運命的なものも、さらにまた偶然であることもあり、まことに不可思議です。

「ご縁」という味わいの深いことばがあり、そのあたりのことをもの見事に表わしているように、どんな場合の、だれとの出会いも自分にとって決して無縁無意味ではあり得ませんし、むしろ人とのかかわりこそが、生きていくことの具体的な実相そのものであると考えられます。

数秒の接触から三世の契りまでの時間の長短、好き嫌い、損得などかかわりの分類基準はいろいろありますが、自分の自由な選択の余地はまことに少ないのが実体です。

そして、そのうちの数少ない何人かからは、人生における決定的な影響を受けていることに気が付くのです。

自分個人の歴史は、誰かとの出会いの歴史であり、重ねる日々は、その連環であると思うのです。

結びつきの深い、浅い、大きい、小さいと言っても、それははじめから決っているものではなくて、要は結び付き、かかわり、つき合い方の内容によって定まるものようです。

血のつながりがあるから親子だと一義的に思っている、実はそればかりではなくて、日々のかかわりとつき合い方の質と量があるからであって、仮りに一度も出合っていないならば、人間関係に於いては全くの赤の他人になってしまうこともあり得るでしょう。

結び付く相手は実在の人とは限りません

で、本を通じての人、昔の人、ときには架空の人のこともあります。

どんな場合でも、こちらから手を伸ばしての働きかけの度合いに応じての結び付きでありますし、時にはその出会いとかかわりの度合いによって、その人の歴史が変わることもあります。

人とかかわりを考えるとき、目の前の現実的なつき合いの大切さを忘れてはいけないと言われていますが、畢竟すれば誠意誠実ということでありましょうか。

仲々に難儀な修行ではありますが、それだけ大切な事柄であり、生き方、暮らし方を豊かにする要諦みたいなものであるのかも知れません。

今、次代を担う若人や子供達の世界で、所謂友達づき合いの意識が薄れつつある傾向を指摘する識者が多いのですが、それは大人の世界の反映ではないかと考えて、年寄りの冷水ながら心配です。

一方、大人達も毎日の暮らしの中で、自分にも他人にも、そして自然にも、じっと心を向けるということが少なくなって来てはいまいか、便利だとかの目先のことの送り迎えに明け暮れてはいないだろうか、などと思うのです。

たまには、ちょっと立ち止まって、これで良いのだろうか、あるいはこれはどうなんだろうと、ゆっくりあたりを見廻してみ

たら、もっと大切にしなければならない人が目の前に何人もいることに気がつくかも知れません。

そうすれば、明日からの人とかかわりに小さな感動と感謝が見出せるような気がいたします。

「人との良きめぐり合い、良きかかわりは人生の至宝です」……国際企業から禅の修行の世界に入った禅堂大乘寺の太玄宗純禅師のこの言葉が、魂に刻み込まれ、脳裡から離れることはありません。

第一話 おわり
(協会事務局長)

